

杉山平助論

都 築 久 義

はじめに

杉山平助がいま論じられることはほとんどない。その名前さえも忘れられている。しかし、昭和十年前後の一期、彼はたしかにマスコミのスターであり、ジャーナリズムの花形であった。ここで、わたしはプロレタリア文学解体期に、匿名批評の仮面をぬいでさっそうと登場し、太平洋戦争の開戦とともに突然消えた、杉山平助の文学的生涯を探って、彼を再評価しようという意図はない。が、昭和十年代文学の研究をてがけているわたしにとって、彼が看過できない文学者であることは感じているし、なによりも粗野ではあるが、肉声でいつも語った彼の言動にはすこぶる興味を覚えることも事実だ。

杉山平助伝を書くには資料不足であり、とくに文学的出発以前と、太平洋戦争下については不明な点も多いので、日中戦争前後の最も彼が活躍した時代を中心に論じてみたい。なお、杉山平助のご子息、杉山厚氏に格別なご協力を得たことを記してお礼申しあげておきたい。

生　い　た　ち

杉山平助は明治二十七年六月一日大阪で生まれた。本籍地は大阪市西区北堀江通り六丁目十五番地。戸籍簿に、「父岡山県岡山市大字西田町拾七番地杉山岩三郎認知届明治四拾四年四月拾七日」とある。彼は杉山岩三郎の庶子だった。杉山岩三郎については『岡山人名事典』に次のような記述がある。これで明かなとおり岡山では名の通った実業家であった。

杉山岩三郎（一八三六一一九一三　天保七——大正二）。明治時代の実業家。岡山藩の人。中川氏のち杉山氏の養子となる。早く武技を学び練達。文久三年藩主に随行し禁裡守衛。慶応四年松山追討。明治元年藩兵の監事として東北各地に転戦功あり。廃藩後岡山県典侍、島根県権参事など。退官後旧藩士救済のため有終社を興こし、明治十六年の政府の授産金をもとに岡山紡績所を創設。士族授産の補助として十九年児島郡興除（現岡山市）沖を干拓して七十余町歩を得た。同二十三年欧米各国の商工行政視察のち、二十二国立銀行の取締役、中国鉄道の社長などの他に、銀行、会社の設立発起者あるいはその重役となり、岡山財界に貢献するところ多く、「岡山西郷」といわれた。大正二年七月没。七十八才。

母は杉山宇野。杉山の戸籍簿に「明治貳拾八年九月拾四日前戸主宇野ノ死亡ニ因リ家督相続届出大正参年拾月拾六日受附」との記事がある。自伝的な小説『日本人』によれば、宇野は岩三郎に目をかけられた芸妓。彼女は同じ境遇の友人から勧められてキリスト教の信仰を持つようになり、岩三郎に落籍されたあと女学校まで卒業させて

もらった。信仰を持ち女学校を卒業した宇野と友人は、「今は新生した精神的姉妹として、手をつないで、生涯を孤児の救済に捧げることになった」。しかし、彼女は岩三郎の子を宿し、「彼を生むと間もなく、母は全く碎かれ、悩みの多い短い生涯を終った」という。平助の父と母は偶然にも同じ姓であったため、正妻の子でない彼も父と同じ姓を名ることができた。

わずか一歳で生母と死別した平助は、大阪の八百屋の子として養育され、やがて東京へ引きとられていった。東京の家は鯛屋とよばれた料理屋兼旅館。新しい母親は、「お母さんの年から彼の年を引くと、十五残った」ほどの若い女性である。彼女もまた芸者であり、母が亡くなるとまもなく、父に落籍されたのだった。父は東京に来るといつもこの家に泊った――。

尋常三年の秋の或日、洋服を着た若い紳士が鯛屋の玄関に現われた。紳士は岡山のお父さんの依頼で来たと云って、彼を鯛屋から連れ出し、市内の小学校の寄宿舎へ入れられたのである。

杉山平助が慶応義塾幼稚舎に転入学したのは、明治三十五年十月六日、卒業は三十九年三月である。三十一年から学制改革で六年制の小学校として再発足した同校の三年生に編入した。ただし幼稚舎の記録には稲垣平助の名前で載っている。本籍、住所、証人住所は、東京市本所区向島須崎町一六〇と同じ。証人は稲垣洋一郎（伯父）。したがって平助は伯父稲垣洋一郎の養子になったと推定される。もっとも、大学の方の記録では、杉山平助に戻り、本籍も大阪市西区に復し、保証人も他人にかわった。そしてこの記録には、入学前の学歴欄に、明治四十五年三月、本塾普通部とあり、入学年月日は明治四十五年四月、退学年月日、大正二年四月と出ている。小学校（幼稚舎）、

中学校（普通部）時代に平助が、何を考え、何を夢見ていたかを、「文学的自叙伝」（『新潮』昭10・3）から拾つてみる。

幼少より絵本などみることが、好きだつたやうにおぼえてゐる。小学校は、慶応義塾幼稚舎の寄宿舎ですごした。その中では本の好きな生徒として認められてゐた。六年生の頃に、私が大將になつて五六人の生徒をあつめ、寄宿舎内で雑誌を発行したことがある。第一号はコンニャク版で刷り、第二号はトウシヤ版で刷り、大いに喝采を博した。（略）その頃、寄宿舎の監督の或る人は、君は大きくなつたら文学者になるがよい、と云つた。それが私には、ひどく輕蔑されたやうな、何とも云へない厭な氣持にさせた。その頃、私は海軍大將になるつもりであつた。文学などといふものは、決して男子のなすべきことでないと思つてゐた。

やがて中学生になると――、

普通部にはひつて、間もなく、私は農業をやりたいと思ふやうになつた。幼少の頃に日露戦争の騒ぎを経験して、愛国的傾向の極度に強化されてゐた私は、日本の国の狭いこと、人口が非常な勢力で殖えて行くこと等を、読んだり聞いたりして、子供心にも何となく心配な氣もちがしてゐた。そこで南米へ移住して、大農園を研究し、日本人の新天地を開拓しやうと考へはじめたのである。私は、學課などはいちやうちやり放して、農業雜誌などに読み耽つた。ゆくゆくは札幌農学校を卒業して、直ちにアメリカへ渡るつもりであつた。十五六歳の時の夏休み中に、「理想の農村」といふ題で、さうした方面の自分の夢を綴つた小説をかいたことがある。

ところが、「十六七歳から、私の精神に一転機が来た」。中学校の最上級生の頃だ。愛国心に疑問を感じ、人間の利己心や虚栄心に気づき、人類愛にめざめ、従来の道徳に反抗心を抱くようになった。そのうえ自分の境遇についても苦しみ始めた。ちなみに、杉山岩三郎が平助を子どもとして認知した明治四十四年四月は、平助の十七歳のときである。『日本人』の記述にしたがえば、平助自らが岡山に父を訪ね、認知を頼んだ。岩三郎は平助を認知して二年後に亡くなった。しかも、「非常に苦しい煩悶時代」をむかえた矢先に、「つひに慶応の大学予科時代に、私は血痰を吐き、茅ヶ崎の南湖院へ入院した」のである。「こゝでこの後ほぼ五年間の療養時代をすごした」ため大学は理財科予科一年で退学した。

杉山平助が闘病生活を送ったのは、「この後ほぼ五年間」ですまなかった。『三田文学』の昭和三年十二月号「回顧一年アンケート」に「病床で過ごした」と回答しているから、この頃も病床にいたはずである。ただ、この間に小康を得た時期もあって、横浜税関に一年、その後、清水税関にしばらく務めたと「文学的自叙伝」でふれているものの、「やはり風邪をひき易く、風邪をひくと、喉だの肋膜炎だのいろいろな症状が併発し、欠勤する日がつづいた」らしい。清水時代には「一年半といふもの、三保村の百姓家の座敷に寝たきりであつた」ともいう。いずれにしても病気がちでまともな勤務はとてできる体ではなかったようだ。

いま彼の生涯を振り返ってみると、実には大正の初年から昭和のはじめまで、十代の後半から三十代の半ばまで、すなわち青年期のはほとんどすべてを、闘病生活で占められ、天涯孤独のまま過ごした。この不幸な生いたちや境遇、恵まれぬ健康や家庭生活、そして放浪と貧困こそが、彼に独特の人生哲学と人間観を与えたにちがいない。昭和五年、父の郷里に近い広島県出身の同病体験者、秦トミ子と結婚して新しい人生が始まった。平助三十六歳のときである。

文学的出発

杉山平助の長い闘病生活は、海軍大将の夢や南米の大農園の経営の望みを絶ったかわりに、かつて「決して男子のなすべきことだと思つてゐた」文学の道を切開いた。大正五年十一月、『大阪朝日新聞』が本社新築記念に行なつた懸賞文芸にまず応募したのである。募集は小説とお伽話。小説の締切りは大正六年五月三十一日。選者は夏目漱石、島崎藤村、幸田露伴の三人。彼はさっそく「第一期」と題する小説を送った。発表は半年後の大正六年十二月二十三日。「第一期」は選外佳作三篇の一つに入つた。一位は野村愛正の「明ゆく路」、二位は沖野岩三郎の「宿命」。選外佳作はほかに井岡邦雄、川口陟の名前があつた。ついでながらお伽話の部の一位は、のちの童話作家浜田広介である。

杉山の作品は選外佳作だったために新聞に掲載されず、内容はさだかでないが、漱石急逝で選者となつた内田魯庵の選評からおよそ察しはつく。選評はこう評している。

「第一期」は極めて純真なる筆法でその自叙伝の一部を書いたもので、恐らく著者の偽らざる告白であらんと思ふが、成功の勇者の妻腹の子として生れた日蔭者の極めて萎縮した生活が、何処となく仄いて人生の一部の色彩として極めて貴ぶべきものであらう。

「文学的自叙伝」によれば、「当時二十三歳の気位の高い青年だつた私は、選外佳作として自分の名を新聞にさらし者にされたことをたとへやうもない屈辱に感じ」たという。そのため文学を志す以上はまず自分がこれなら

世に問うていいという自信のある作品を完成するまでは、決して文壇的知人などもむべきでないと固く信じて、その時機の来るのを待った。前述のとおり、このあと小康を得て横浜の税関に務め、清水税関に転任した。この地で病氣が再発、三保村の農家の座敷で一年半の療養生活を送ったのだった。

この一年半のうちに、私の処女作「日本人」を書きあげたのである。……やうやくこれなら自分の処女作として自信のもてるものを完成することができた。私の二十八歳のことであった。

自信作は完成したけれども自信作ができるまでは文壇的知友を求めるべきではないと信じてきたおかげでこれを発表する手段も、どこかへ推せんしてもらう方法もなかった。そこで、「自分一個の外にたよる者はない、自分で金をつくつて自分の力で出版してやらうと決意し」、この資金を作るためにまた数年間を要した。大正十四年暮れにやっと世に問うことができた。B6版、表紙はクロス製の上製本で本文五百五十三頁の大著である。奥付には定価も二円三十銭とあり、発行年月日、大正十四年十二月三日、発行元は昭文堂（東京市牛込区市谷田町一丁目十六番地）となっている。

この本の寄贈を受けた一人、生田長江がこれを読んでいたく感動し、すぐに賛辞を『国民新聞』に寄稿。それは大正十五年一月十一日に、「小説『日本人』を読め」と二段ぬきの見出しで掲載され、人びとの目をひいた。

その名を耳にしたことさへもない、作者杉山平助氏から突如として、原稿紙千四百枚にも当るほどの長篇小説の寄贈を受けた。作者の有名なると無名なるとを問はず、余り急いで小説類を読んで見ることの習慣を有し

ない私が、小包の包を解かせると直ぐに取り上げて、最初の二頁でものぞいて見やうといふやうな氣になつたのは、單に偶然な事であるよりも、寧ろ運命的な事であつたらしい。

読むともなしについ無意識のやうに十頁ばかりを読まされて来た私は、『今こんな物を読んでゐてはいけない、もう止さう』と幾度か自分をたしなめながらどうしても止めることが出来ないで、到頭私の二日間のプログラムを滅茶苦茶にして、殆んど文字通り一氣に読んでしまつた。読まされてしまつた。少くとも近代の日本語で書かれた小説なぞの中に、これほど力強く私を引きずり込み、共鳴させ、感動させ、驚嘆させた物はない。

と、いった破格の書き出しの、この賞讃は、原稿用紙にしても、八枚にのぼる長文であり、「現代日本の文藝家に対して、最も先づ要望してゐた殆んど総ては今この一無名作家の処女作『日本人』に於て、立派に与えられてゐるやうに思はれる」と、最大級の賛辞だ。無名のうえに一面識もない自分を認めてくれた生田長江を、鎌倉の自宅に訪ねたことはいうまでもない。その初対面の様子を彼は、次のように言っている。

生田長江といふ人に会ふと、私はこれまで自分が遠くから眺めて、侮つたり嫌つたりしてゐたところのある人より遙かに偉い立派な人であることを始めて知つて、尊敬の念をおこした。しかしそれと同時に、その人格的欠陥も、私の眼には直ぐに看取されてゐたので、自分の師と仰いで導いてもらはうなどといふ氣もちなみに、もちろん夢にもおこらなかつた。

これは「生田長江先生と私」(『中央公論』昭11・2)と題された追悼文であるが、生田の晩年は杉山との關係が

最悪の状態であつたから、幾分か杉山の感情はたかぶっていることを割引かねばなるまい。生田と杉山の間柄が陰悪になり、絶交関係になつたのは、晩年の長江が渾身の力をこめた「釈尊伝・第一部」（『改造』昭5・7）と「釈尊伝・第二部」（『改造』昭9・11）を杉山平助が「文芸時評」（『改造』昭9・12）で酷評したのにたいして、長江が「自作自評論——附、拙稿「釈尊伝」の物語的内容、その表現形式其他——」（『文芸』昭10・2）で激怒し、杉山を罵倒したからである。杉山は生田の「釈尊伝」は散漫で読みづらいつと批判した程度であつたが、生田の方は杉山を雲助呼ばわりした激しい調子だつた。かつて推賞した『日本人』も、「いづれ其内批評家として不行届を公衆の前に陳謝する事を、恐らく免れないだらうと覚悟してゐる次第である」と言つてはばからなかつた。それは生田長江がこの世を去る一年まえのことである。善悪是非はいずれにあるにしろ、二人の間柄には師弟のうるわしさがなかつたことは気の毒だつた。

杉山平助を最初に認めてくれた文壇人は、たしかに生田長江にちがいないけれども、彼に目をかけ、なにかと引き立ててくれた文壇人は、三田の先輩で面倒みがよかつた水上瀧太郎である。前述のごとく生田長江には必ずしも好感を持っていなく、最後は喧嘩別れまでした杉山平助も、水上瀧太郎には同じ追悼文でも、こうもちがつた書き方をしている。題も親しみをこめた「阿部さん」。

私自身が世間から嫌はれたり増まれたりすることの多い人間であるためかどうか、私の方でも世間に好きな人はすくない。（略）その嫌ひな人間のいつぱいつまつてゐるこの世の中にも、ごく稀に好きな人がゐないでもない。そして、今度死んだ阿部さんなんぞは、私が、本当に心の底から好きだと思ひこんでゐた少ない先輩の一人であつた。そして、阿部さんの方でも、また私を好いてゐてくれたと、私は勝手に信じてゐるのである。

(略) もちろん、私は、阿部さんと親近してゐたわけでもなく、殊に近頃は、ろくすつば顔をあはせることもなかつた。しかしながら、私のやうに四面八方敵だらけの者にとつて、いくら離れてゐても、この人にかぎり自分の味方だと考へることは、やはり心強いことであつた。それだけに、彼の死が、私に与へた寂しさは、人知れず深かつたのである。

『三田文学』 昭15・5臨時号)

と、水上瀧太郎の死を心から悲しんだのだった。杉山は自らも言うとおり、生涯仰ぐべき先輩も、心を許す友人もほとんど作らなかつた。それだけに杉山にとって水上先輩の死は大きな痛手であつた回。

「この人は、きつと今に相当な人になりますよ。この才能はどこかの新聞あたりで買ひますね。」

そんな事を水上先生が僕に言はれた。問もなく先生の紹介があつたかどうかよく知らぬが、三田に書いた社会時評が好評で菊池さんが認め、文芸春秋に毎号執筆するやうになり、朝日の「豆戦艦」も創設され、以来メキメキと杉山君の名声は高くなつて行つた。(中略)今のやうになつてしまつた杉山君を誰も不思議な存在とも何とも思つてゐないが、病弱で失明するかも知れぬ憂に、多少の焦燥を感じてゐたであらう杉山君の今日の才能を見抜いた水上先生の炯眼に頭が下がると同時に、その埋れたダイヤモンドの光を輝かしめるにいたつた杉山君の得難い才能にも充分敬意を表すべきである。

と、『三田文学』(昭11・3)の「特集・杉山平助氏の作品印象」で、和木清三郎も証言している。『三田文学』復刊(大15・4)に心血を注いだ水上瀧太郎の自宅で聞かれていた水曜会にも、杉山は当然のことながらしばしば顔

を出した。水上が後輩、とりわけ三田出身の育成に努めたことはよく知られているが、杉山平助もまぎれもなく『三田文学』育ちの一人であった。杉山が文壇にデビューする昭和八年までの、彼の『三田文学』への主たる寄稿作品を次に掲げておく。(数字は月)

昭和二年 5 下層一断面(小説)

12 無頼漢の詩(詩)

三年 4 共産党事件所感(時評)

7 対支出兵弥次評(時評)

8 治安維持法改正に就て(時評)

四年 2 砂丘の蔭(小説、8月まで連載)

7 最も新しい芸術理論(評論)

10 マルクス主義と帝国主義の戦争(評論)

五年 6 ナンセンス文学検討(評論)

8 田園近代風景(戯曲)

9 社会時評(11月まで連載)

10 「ニイチェ伝」を読む(評論)

六年 1 社会時評(3月も)

5 病狼(戯曲、8月まで連載)

七年 3 時局慢想(随筆)

7 あくたれ (隨筆)

11 茅ヶ崎より (隨筆)

文壇登場

杉山平助が『文芸春秋』の匿名短評欄「文芸春秋」を担当するようになったのは、『文芸従軍記』に抜粋再録された「文壇従軍記」と照合すると、昭和三年九月からと推測される。「まえがき」にも「マルクス主義の猛威を振へる昭和三年秋より」云々とある。同著には昭和六年までが収録され、以下、七年と八年が『氷河のあくび』に、九年から十三年までが『文学と生活』に載っている。それ以後は見当らない。

『三田文学』の社会時評が菊池寛に認められ、『文芸春秋』の匿名短評を執筆するに至ったことは、さきの和木清三郎も述べているところだが、荒畑寒村に「東朝といふ虎の威をかる野狐批評家」(『豆戦艦』記者に与ふ)『文芸春秋』昭8・6と)と非難されたのに抗議して、彼は文壇登場の経緯を次のように釈明した。

僕は最初、『三田文学』なる雑誌へ時事及文壇への無遠慮な感想を発表してゐたのを、未見の菊池氏に認められ、次第に『文芸春秋』に寄稿させてもらへるやうになつた。そこで更に卒直な批判をしてゐたのが、徐々に外でも認められ、次第に荒畑君のいはゆる「大新聞」にも批評の筆をとるやうになつたのだ。その間を一貫して、僕の批評態度といふものは少しも變つてゐない。いつも卒直で無遠慮であつた。いはゆる「大新聞」に執筆するために始めて虎の威を借る狐のごとく、急に無遠慮になつたのではないのである。たゞ、そこで僕の態度がひろく一般に知れ渡つたといふに過ぎない。

「大新聞」の「卒直で無遠慮」な批評態度が、「ひろく一般に知れ渡つた」というのは、『東京朝日新聞』の匿名短評欄「豆戦艦」のことだ。「豆戦艦」は昭和六年十二月二十二日に創設され、匿名で毎月の雑誌評を行なった。創設当時は無署名。年が明けて七年一月二十七日付から氷川烈の名が入った。「豆戦艦」はしばしばその匿名を、氷川烈、横手丑之助、大伴女鳥といふ風に変へたけれどもその前半期における筆者は、完全に私一人であつた（『現代日本観』）と杉山は言っている。もっとも、青野季吉の『文学五十年』によれば、

その時代（注・匿名評論流行）に魁けたのは朝日の学芸欄の雑誌短評で、昭和五年のはじめごろ、主任の坂崎坦から相談をうけてわたしがその形式を打ち出したのであつた。二年ばかりしてそれは「豆戦艦」の名で、氷川烈こと杉山平助（略）の担当するところとなつた。杉山が二、三年つづけた後で、こんどは杉山とわたしとでやることになり、大鳥女鳥というのが二人に共通の筆名であつた。

という。いずれにしても、「豆戦艦」の人氣に刺激されて各紙が、匿名批評に力を入れ匿名批評流行の時代を築いたことは周知のとおりである。ちなみに、現在も継続している『都新聞』（『東京新聞』）の「大波小波」は昭和八年三月に設けられた。匿名批評全盛の先陣となつた「豆戦艦」と氷川烈の当時の反響と評判を、矢崎弾は「杉山平助論」（『新潮』9・3）で、

氷川烈の名で「朝日」の「豆戦艦」が運転されはじめたとき、ジャナリズムや文壇はひとまづこの匿名のふり

まはす犀利な寸評に七分の好奇心と三分の恐怖を感じたはずだった。いまでこそ杉山がなんとか云つてゐると空うそぶける連中も「豆戦艦」の初航当時はどうであつたか。傍観するものは氷川烈の酷烈で傲岸な裁断力にみとれて新鮮な批評の魅力を感じ、彼の小味な刃をうけたものはきつと小手さきに手傷を負うた。

と、語っている。

こうした反響と評判を得て、昭和八年五月、最初の評論集『春風を軌る』を大畑書店から出版した。杉山平助ではなく氷川烈の名で出したところに、「豆戦艦」の好評ぶりがうかがえる。その年の十二月には、十年まえに資金の工面で苦勞した旧著『日本人』も新潮社が出してくれた。『文芸年鑑』（昭和九年版）にもはじめて登載され、ここに名実ともに文壇に登場したのである。そして「一九三三年度に於ける文芸批評家としての活動の量的な方面から見れば、彼が『ナンバーワン』だといふことはたれしも承認する」（同前）ほどの活躍ぶりをこの年に示したのだ。翌九年も六月『文芸従軍記』（改造社）、十二月に『人物論』（改造社）、『氷河のあくび』（日本評論社）と、たて続けに著書を刊行して世間の注目するところとなった。

杉山の批評がジャーナリズムで脚光をあびた理由について、前引の矢崎弾は、

なぜに彼の批評は新鮮かつ鋭犀に見えたのか？ いままでの文壇では批評家が生れながらの文学信者で文学を外面化することには冒瀆を感じるひとびとであつた。つねに生れいづる作品を文壇的常識のなかに封じこめ、文壇といふ温室の外にもちださうとはしなかつたのである。そのやうに甘やかされて生気を喪ひゆく温室文芸を社会的常識の暴風にさらしながらその、成育状態を觀察したのが杉山平助である。

と説明している。つまり「彼には当時の文壇の誰れからもきかれなかつた粗暴な肉声があつた」という、その「粗暴な肉声」に文壇は「七分の好奇心と三分の恐怖」を感じジャーナリズムが着目したわけである。

ところで、杉山の「粗暴な肉声」の原点は二つだった。芸術（文学）の社会的価値と芸術家（文学者）の名声欲について、「当時の文壇の誰れからもきかれなかつた」ことを発言しただけのことである。彼は「芸術品はその他の一般的生産物と等しく、自然的素材に人間労働力が加つて始めて出現する」から「一般的生産物たる靴、傘、刀剣、自動車等々と区別なく」、「その社会的性質は規定される」（「商品としての文学」）とわりきり、「芸術も一種の職業に過ぎない」というのが「もとより健全な見解であるのだが、この健全な見解が歪めて把握されたがために非常に不健全な雰囲気が発生してゐるといふのが、今日の文壇の実相ではないであらうか」（「芸術至上的とは？」）と平然と言ひ切つた。

むろん、文学商品論はつとに菊池寛などがはやくから唱えていたが、それでも菊池寛は純文学と大衆文学にいちおう垣根を置いてこたわつた。杉山の方は「芸術的価値」と「商品的価値」のちがいは認めながらも、その垣根を無視し、芸術が仲買人（出版社、ジャーナリズム）によって客（読者）に売られ、その金によって生産者（芸術家）が生計を営む以上、社会的価値としては一つの商品だ、と断言したのである。なるほど作品を売って生活をしている芸術家にとって彼の主張に、全く異論をはさむ余地はなからう。とはいへ、これでは芸術の尊厳も芸術家の誇りもありはしないではないか。

たしかに芸術家——文学者は自分の作品が多く読まれ、高く売れることを願っている。そのかぎりにおいては一般商品と同様な発想にたつていながら、一方で一般商品と同レベルの単なる商品として扱われることを嫌い、なにか

高次元なものとして考えているのも隠せない事実だ。だが、芸術が論じられるときには、少くとも商品として論じられることはなかった。そこで彼は、「芸術を売る生活」（『文学と生活』）の現実を直視し、「非商業主義的な文学は可能か」（『氷河のあくび』）と、「文壇といふ温室」に殴り込みをかけたのである。気になりながらあまり話題にしたがらない、原稿料や講演料のことも彼は平気で口にしたのはいうまでもない。

「粗異な肉声」の原点のもう一つは芸術家の名声欲。

作者が作品を発表するのは、生活のためでもあるが、また有名になりたい野心のためでもある。元来虚栄心の旺盛なるものなくては、芸術家なんてバカバカしいものにはなれるものではないのである。ところが現代では、どれだけ勉強してどんな実力を獲得しやうが、どんな傑作を完成しやうがチャアナリズムに認められることなくしては有名になれない。（略）そこで、どうにかチャアナリズムに認められたいと焦るやうになるのもまた当然の人情だ。

（「ジャアナリズムの誘惑」）

まことにもって「粗暴な肉声」とは、かようなことをさすのであろう。いみじくも尾崎秀樹が指摘したとおり、それが「杉山平助のすぐれているところ」かどうかはともあれ、「自明の事実でありながら、文壇人はなんとなく自分の恥部をさらけだす思いがしいたがらない」ことを「ズバリといつてのけた」（『大衆文学論』）のである。杉山は「私の嫌いなもの」（『現代日本観』）で、「まづ第一に、何よりも嫌いなものは、偽善者だ」と言い、「文壇的偽善者といふのは、寝ても醒めても、芸術芸術といふやうなことがかり口走り、その実さいは、いつも文壇的党

派閥係や利害打算でいづばいになつてゐるやうな連中をいうふ天下の鼻つまみだ」と続ける。おそらく杉山は、本心では文壇の野心や売名にきゆうきゆうとしていながら、口先きではまるで無関心を装つたり、自分でも理解できていないむつかしい理屈をまくしたてたり、それをまたさもわかつたふうにふるまつてゐる文壇人に、とどめようもない怒りを感じたのだ。その怒りが、矢崎弾が言つたように「許されるかぎりの自由主義的な刃をうちふつて傲腹にたれかれの差別なく全方壇を相手に切りまくつたのである」。恥部をあばかれ偽善をえぐられることは、当事者にとってこれほどつらく恐怖なことはないが、第三者にとっては、これほどおもしろく好奇心をそえられるものはない。杉山平助の人物論が評判となり、ジャーナリズムが目を着けたのもまさにそこにあった。おかげで彼はあちこちに人物論を書き散らし、人物評論集と銘打つた著書が『人物論』、『街の人物評論』と二冊もあり、ほかにもおおかたの評論集に人物論が入っているから、その数はおびただしく、対象の分野も広い。が、どれもこれも斬り口が似ていて、印象や直感だけを述べているので書かれた時点では興味深くても、時がたてば興ざめがする。ジャーナリズムにおだてられて走り書きしたため、せつかくの鋭い視点も直感も有効にいかされなかつたのは惜しい。せめて一冊の作家論、一人の評伝がほしかった。

所詮杉山平助には、「芸術至上主義」だの「作家は霞を喰つて生きるべし」だのといった文壇の雰囲気は肌に合わなかつたはずだ。芸術や文学的営為はもとと虚業であり、実生活や日常生活の観点でみれば、はじめから偽善の上に成り立っており、実業の物指しではかることじたい無意味ではないか。とすれば、文壇の花園に土足で踏み込んできた闖入者に、最初は驚きもしたし好奇心にもかられたが、しだいに彼の論法がわかつてくると、かえって彼を文壇が異端視するようになったのは自然の成り行きだった。

やがて「支那事変」が始まると、「私は去年（注・昭和十二年）頃から、文壇小説に対する私の興味は、著るし

く低下しつゝあつた。(略)私の話相手は、文学者より、政論家や経済人の方が多くなり、私は方々の倶楽部や事務所で、好んで国策を論ずるやうになつてゐた」(『支那と支那人と日本』と、自ら文壇から遠ざかった。

どんなに高踏な芸術論も、いや、それが高踏であればあるほど現実を直接動かすことはまずありえない。しかし政治論や経済論は直接的に世の中を動かし、人びとの日常生活にかかわる。偽善やタマエも通用しない。しかもこの頃は眼の前で戦争が行われ国の運命がかかつていたのだ。杉山は水を得た魚のようにこちらの方で本領を発揮した。やはり彼は、維新の時代に国事に奔走し、やがて実業界で名を成した人の血を継いでいたのであらう。

憂国の至情

昭和の戦争の時代は、六年の「満州事変」に端を発し、十二年の「支那事変」で本格的となり、十六年の「大東亜戦争」でついに総力戦に発展し、二十年八月十五日ようやく終った。もちろん、この十五年間、人びとはいつも緊張し、戦争を感じていたわけではない。「満州事変」当時は、知識人の間で批判的な立場から関心が寄せられても、一般民衆の間では、満州移民が話題になつたりしたが、日常生活のなかでの戦争の実感は乏しかったはずだ。たとえば、大衆雑誌『日の出』(昭7・11)の特別附録『非常時読本』を見ると、「外交に敗れたら、経済戦となつたら、戦争となつたら」の見出しで、民衆の不安に込えている。「満州」を強引に建国し、国際連盟を脱退(昭8・3)する雲行きに、民衆が不安を感じ、成り行きに注目しても、まだまだ「戦争となつたら」であつて、戦争という実感が人びとに迫つてはいなかった。

しかし、「満州事変」勃発に対する知識人の反応や大衆の動向に関して、『東京朝日新聞』（昭7・1・25—26）の「文芸時評」は、「ひとつの告白——砲声を耳にしつゝ——」の見出しのもとに、

おそかれ早かれ、日本の文芸界も一度はファツシヨ風潮の洗礼をうけなければならぬといふことは、普通水準の識力あるものなら、たれしも見えすぎきつた事実として予想してゐたことであらうが、その予想の案外に急テンポに近づいて来たのが、この節の世間の雲行きである。（略）これでアメリカとでも事がおこれば、さぞかしすさまじい勢ひで速製愛国者への転換が続出するであらうと予想されてゐたが、アメリカどころか、タンクも飛行機も持ちあはせない烏合の支那勢をちつとばかりやつつけたといふだけで、もう眼の色をかへる人たちがチラホラ飛びだして来たやうな始末である。恐らくこの勢ひは、今後は更にいよ／＼深刻化する一方で、その時になつて今日を顧みればまだ／＼その勢ひの生やさしかつたことが歎じられるに至るであらう。

と、杉山平助が将来の人びとの動向を看破しているのはさすがだ。「大東亜戦争」——日米決戦で「すさまじい勢ひで速製愛国者」が続出した事実を想起すれば、杉山の予言は見事の中しているではないか。当時はまだマルクス主義も健在であつたが、「それが実力の伴はない空手形に過ぎない」ことを見抜いていた彼には、「階級の問題と民族の問題について、イザといふ時日本の大衆がどつちにより深く動かされるか」（『文芸五十年史』）は明かだった。大衆だけではない、知識人ともイザ、というときは同じだ、ということを目ざら願ひて知っていたのである。

卒直に白状してしまへば、私のときもその一人だ。私は、本能人としての自分が、日本人らしい強烈な民族

意識に、骨髓まで浸じゆんされてゐることを告白する。毎朝新聞をひろげ、健気な兵卒たちの活躍ぶりを読みながら、しまった！と思つた時は、もう涙をポト／＼こぼしてゐる。日本軍快勝の戦報は、まるであんまでもとつてるやうに、全身の神経を快よくもみほぐしてくれるのである。

と、いかにも「肉声」の人らしい正直な告白をしている。が、一方で、

私は、偽るところなく、支那人や朝鮮人やアメリカ人やドイツ人への同胞感を私の内部に感じてゐるといひ切ることが出来る。しかしながらそれらの感情は、私が日本人として、同じ日本人が他の民族に侮られ、圧迫せられ、虐殺されたといふやうな通知を聞く時に感ずる憤りや復しう心の、毒々しいまでに強くすさまじいのに比較して、甚だ弱弱しくてさう白なものであることも、否むことが出来ないのが事実なのである。

と、これまた素直に胸の内を白状した。もちろん、「理性に従はうとすれば、何とはなしに自分が偽善者めいた柄にない付焼刃の役割を演じる不安」も感じた。他者の偽善を攻撃してきただけに、自己のそれもよく凝視しているが、結局、「満州事変」は実感の伴わない遠い戦争であつたから、

私には爪のあかほどながら気骨もあるし、人間に対する誠実も、まだ最後の一滴までは失ひつくしてゐない。

と、情感に身をまかせ、本能の命ずるままに行動することに理性で歯止めをかけて「そんなウソ恥かしい真似がど

の面さげて出来るものか！」とタンカを切った。

しかし民族の本能と国際的感情の対立、理性と本能の葛藤が彼の内部から消えるには、時間は要しなかった。時局は速いテンポで進み、昭和十二年七月七日の芦溝橋の銃声にいよいよ人びとは戦争を実感した。政府も戦時体制の整備を急ぎ、戦争の時代に本腰を入れた。「非常時」がついに来たのである。

ジャーナリズムもこの事態を重視し、ただちに即応した。『東京日日新聞』がトップを切って、八月三日に吉川英治を現地に派遣し、二十日後には入れ替りに木村毅を送った。雑誌社の方も、『主婦之友』から吉屋信子、『中央公論』から林房雄と尾崎士郎が、八月下旬に現地に飛んだ。『東京朝日新聞』の囑託（昭和十年）になっていた杉山平助が、これらの作家の後塵を拝して戦地へ出かけたのは、彼らがすでに帰国して戦地報告がジャーナリズムをにぎわせてからである。先発隊に遅れること一カ月余、十月中旬に東京を出発した。彼は二カ月余の現地滞在をはじめから予定して行った。十月十二日に東京を発ち、神戸から船で門司を経て大連に着き天津・蒙古・北京・上海・南京とまわって帰って来たのは、十二月の暮れである。この間、『改造』や『東京朝日新聞』に紀行文を送稿し、帰国後も感想を新聞や雑誌に寄稿した。それらは昭和十三年五月十三日付で、『支那と支那人と日本』にまとめて改造社から刊行している。その「まえがき」で、杉山は興奮する。

今や、如何なる平和主義的念仏を唱へやうと、愚痴の百万遍を繰り返さうと、現実は一歩も進展するものではない。しかも日本を押し潰さうとする国際的重圧の、見えざる鉄鎚のごとく、刻々と我々の頭上に迫りつゝあることを、私は、現地において直感して来たのである。この事態に直面して、もはやあらゆる無為退嬰の消極的態度は、意味をなさなくなつた。精神の領域においても、私は、従来の優柔不断な態度をかなぐり捨て、

積極的攻撃に転ずるより外なくなつたことを知覚したのである。この書物は、私の支那旅行の報告であるとともに、かゝる意味において思想史の一片だ。

わずか二カ月余の戦地体験が、かくも杉山の意識を変えてしまったことに、善悪の判断とは別にガク然とさせられるではないか。砲弾をかくぐり、日本軍の苦闘を眼のあたりに目撃すれば、民族の危機感や戦闘心をかきたてられて、知性も理性もどこかへ行ってしまうのだろうか。「支那事変」を現地に見てきた文学者のことごとくが、同じ感慨と思いを至したのは、その頃花盛りだった従軍記や現地ルポが如実に物語っているだけに、知性や理性のはかなさを思い知らされる。

ただ、この当時には相手が日本とは歴史のかかわりの深い「支那」であることや、同じ東洋人であり、あるいは或る種の優越感もあつて、「満州事変」の頃に杉山が持ったような逡巡ををふっきれぬ戦地体験を持たぬ知識人も、少くなかった。そこで杉山平助は帰国するや、すぐに「危機における日本のインテリゲンチヤを分析す」(『改造』昭13・4)の筆を執り、彼自身の「心理の発展」を縷々と述べ、「過去の自分の不明と、優柔不断とを、天下に謝罪」した。そして「日本のインテリゲンチヤも、今こそ観念の遊戲から眼を醒まして、現実に眼を醒ます時である」と呼びかけたのである。呼びかけというよりも、知識人攻撃だったから反感を買った。

この呼びかけに対して高沖陽造が「杉山平助論」(『中央公論』昭13・8)で、「私の知性は杉山平助氏のインテリゲンチヤへの呼びかけに疑問を持つた」と、さつそく杉山の論法を逆手にとった形で痛烈に批判した。

もしひとあつて私に歴史的な七月以前の杉山氏の評論態度と理論を一言で規定せよ、といふならば、私は躊躇

することなく、氏は、その態度からすれば徹底的なオッポテュニストであつたし、その理論からすれば、雑然としたところの折衷者であつたと答へるであらう。……要するに氏においては何か基本的理論が充分に用意されてゐるのではなく、出たとこ勝負なのだ。……永い間のオッポテュニストから今や始めて全インテリゲンチアの自信に満ちた指導理論家たる立場をもたうとされる氏に、然らばどんな優れた理論があるであらうか。

と、まことに正鵠を射た痛いところを突いたのである。もとより、杉山に指導理論などあるわけもなく、これに反論した杉山の「地獄に生きる」（『中央公論』昭13・9）も、「マルクス残党に与ふ」の副題がすべてを表徴している内容だった。この反論に対して高沖陽造は「地獄からの脱出（杉山平助氏の主張）」（同前、昭13・10）で、

ジャーナリズムの激しい浪風のうちを巧みに泳ぎ廻り、あくどい論壇戦術に練している氏は、かういふ標題をつけることが時節柄どんなに得なことかといふことを知つてゐた。それは第一に自己の理論的無能力をいんべいすることができ第二に氏の無内容な主張に反対するすべての者を、威嚇することができる、と考へたにちがひない。

と、完膚なきまでに逆襲した。杉山平助が書いているかとみまがうばかりの論法ではないか。ただし杉山の再反論はなかった。内閣情報部が漢口攻略戦に派遣したペン部隊の一員として従軍し、彼はすでには日本にいなかった。内閣情報部は「支邦事変」開戦一年後、作家の従軍を企画し、十三年九月十日過ぎ、二十二名の文学者を漢口攻略戦に送った。人選は当人の希望をもとに、菊池寛と久米正雄が中心になつて行ない、陸軍班と海軍班に分かれ、

陸軍は久米、海軍は菊池寛が班長として別々に現地向かった。杉山平助は海軍班に所属。吉川英治、佐藤春夫、浜本浩、小島政二郎、吉屋信子が同じメンバーだった。海軍班は九月十四日に羽田を発ったが、杉山だけは一週間まえに一人で先に行った。彼は出発が単独であっただけでなく、帰国も一人で一行よりも相当おくれた。戦局がもう少しに進捗せず、情報部の予定した漢口入城を断念して多くの作家は帰っても陸軍側の二、三人（このなかに林芙美子がいる）と、彼は海軍側ではただ一人残った。そして、揚子江溯江艦に乗って、十月二十六日の漢口入城を果してきたのである。漢口一番乗りの記事が新聞に大きく報道された。得意満面の杉山の顔が彷彿としてこよう。この現地報告は、主として『東京朝日新聞』に寄せ、九月七日の出発から十一月一日の帰国までの詳細な日記も併録して、『揚子江艦隊従軍記』にまとめられた。

この従軍記の「まえがき」でも、「凡そありふれた常識論に頼つて、実行しないうちから、悲観論を唱へたがる愚劣なる連中に対して、これは又何といふ好教訓であらう。近頃の日本の知性的なるインテリゲンチヤの一部にはこの種の悲しむべき懷疑論者が実に多いのだ」と相変らず決意に燃えぬ知識人を非難し、自らの憂国の情をせつせつと訴えた。裏を返せず、いまだに「支邦事変」に対して悲観論や懷疑論を持っていた知識人が少なくなかったことを、はしなくも杉山の「まえがき」が証明している。この知識人たちが悲観論も懷疑論も棄て、民族心の本能に燃えたのはそれから数年後である。知識人たちがこうして戦争観で逡巡している間は、杉山の憂国の情も威嚇もそれなりに通用し、二回の従軍体験はジャーナリズム的に効用もあった。だが、「聖戦」が始まり、ホンモノの国粹主義者や大学教授たちが動員されるにおよんで、彼の役割は終わった。「支邦事変」直後のペン部隊には、二十二名のメンバーに選ばれ、評論家は彼一人の榮に浴したのに、「大東亜戦争」では徴用作家の数十人のなかに選ばれなかった。文壇ばかりか論壇からもほされたのである。

文学報国会でも評論部会の多勢の評議員の一人にすぎなかった。このジャーナリズムでの凋落ぶりは、おそらく絶頂の「支那事変」当時に彼も予想はしなかったであろう。まことに栄枯盛衰の感が深い。

論壇失脚

昭和十六年十二月八日、ついに来るべきものがきた。「支那事変」に比較すれば、戦力的にも規模のうえからみれば、はるかに無謀な戦争であり、道義的には少しも変らなかったが、「大東亜戦争」に対する知識人の批判はほとんどみられず、かえって日本がついにアメリカやイギリスを相手に戦争を始め、なかんづく真珠湾の先制攻撃成功の報に、彼らの多くは手放しの快哉を叫んだ。その遠因が日本にあるにしろ、いわゆるABC包囲網をしかれ、英蘭の日本資産の凍結、なかでもアメリカの石油禁輸措置は、石油の海外依存を余儀なくされていた日本にとって、国家の存亡にかかわる危機感を国民に与え、米・英への憎悪の感情を増幅させたのである。

そしてまた、米・英・蘭・仏などの西洋白色人種が、東南アジアを植民地にして支配している現状に、アジアはアジア人の手で守り、共存共栄をはかり、アジアの植民地を解放しようという大東亜共栄圏構想は、たとえその真意が日本の手前勝手な発想であつたとしても、当時は十分な説得力を有していた。かくして、日本の実力を知る一部の軍人や政治家の慎重論をよそに、「進め一億、火の玉だ」「欲しがりません勝つまでは」と、国家と国民をあげての戦争が始まったのである。知識人・文化人が「十二月八日」にいかに感激したかは、たとえば小田切進が編んだ「十二月八日の記録」(『文学』昭和36・12、37・4)を一瞥すれば十分であろう。

ところが、わが杉山平助は、この「十二月八日の記録」に出てこない。徴用で南方に出かけたのではないからこれまでの活躍ぶりからすれば、ジャーナリズムの感想を求められてしかるべきだった。実は「十二月八日の記録」

だけではない。「大東亜戦争」の開戦——昭和十七年一月以降の『中央公論』や『改造』をはじめ、『日本評論』、『公論』等々、『支那事変』以来彼が縦横無尽に振舞ってきた総合雑誌に杉山の論文は見当らない。「支那事変」当時は一年に数回も出した単行本も、『シンガポール陥落』（初出不明）だけが新稿の『文学と生活』と田中正二郎が協力したと伝えられる書きおろしの『文芸五十年史』のみというさみしさだ。明かに彼はジャーナリズムから縮出され、論壇から失脚した。

このあたりの事情をうかがわせるものとして、講談社の『日本近代文学事典』で田中正二郎は、「太平洋戦直前には時の外相松岡洋右の、外交姿勢を全身的に支持する『松岡外相論』（『改造』昭一五・一一）を発表、松岡の失脚とともに失意に陥った」と記し、尾崎秀樹は「杉山平助論」（『大衆文学論』）で、「杉山は文壇からも疎外され、異端視された結果、社会、政治評論へと移行し、車にのりおくれるな、とばかりに松岡洋右という新型車にとびのったおかげで、松岡の政治的失脚と抱合い心中することになった」と、いずれも松岡洋右との関係をあげている。

杉山が松岡洋右を論じたものは十指にあまり、ほとんどは『つひに来たる日』に収録してある。その一つ、『松岡外相の話』によれば、『支那事変』直前に満鉄の夏期大学の講師に招かれ、そのときの紀行文が総裁の目にとまり、東京支社の総裁室によべたのが初対面だった。以後、杉山の『支那と支那人と日本』にも松岡が共鳴し、杉山の松岡への傾倒はますます深まっていたという。

ところが、杉山は『支那事変』以前の昭和十年四月号『経済往来』の「彼等は何処へ行った」（『文学的自叙伝』）で、松岡洋右についてもふれ、ここでは松岡が「人間は感激が大切だ、理屈ばかり云つてゐては駄目だ」と言うのをなじり、「悲しいことには、私の如きどうも理屈が多くあるものである」と、かなりひにくった。その杉山が、

田中正二郎もあげている昭和十五年十一月号『改造』の「松岡洋右論」では、

彼が日米開戦を避けんとするのは絶対の事実であらうが、さうかと云つて米国が、あくまで反省を忘れ、ヤール流儀の暴論をもつて無謀な攻勢に出て来るなら、松岡もまた、如何なる猛然たる態度に出るかははかり知りがたい。

隠忍自重すべき時と、すべからざる時の限界を、彼は正確に判断することができるので。アメリカ人は、日本人のこの氣質について、よくよく考へてかゝらねばなるまい。同時にまた日本人一般が、松岡の判断力を信じて心をあはせて彼を支持することが、最も危険を避ける所以なることを理解せねばならぬ。

たとへば、私・自・身のごときも、日・米・戦・争・絶・対・反・論・者である。しかしながら、万が一、あの松岡が開戦不可避と云ひ出したのなら、もう一言も言はぬつもりだ。それは日本にとつては、宿命のやうなものである。現在の状況において、外の誰がやつてもそれより外なかつたと、考へるより外はないからである。その時こそ日本全国が立ち上るべき時である。私ども、出征年齢を越えたものも屍をさらす時が来たのだ。その日には、私の担当し得る最も危険な部署を与へてもらふやう、政府に嘆願するつもりである。（傍点 引用者）

と、熱烈に松岡洋右への信奉ぶりを披瀝している。松岡洋右が外務大臣として、ドイツ・イタリアに招かれ、ヒットラーやムッソリニーと会談し、帰国の途次、ソ連でスターリンと会見し、日ソ中立条約に調印した際には、わざわざ満州に松岡洋右を出迎えたほどである。「満州里に松岡外相を迎へて」（『改造』昭16・5）に、その様子は詳述してある。尾崎秀樹が説くように、「車にのりおくれるな」という意図で松岡に接近したかどうかはともあれ、

この時期に杉山が松岡洋右に並々ならぬ肩入れをしていたことは事実である。そして日米開戦を避けんとしていたはずの松岡が対米交渉のさなかアメリカの例のハル提案を拒否する態度に出て、日米交渉になお一縷の希望をつないでいた近衛首相に更迭されたこともよく知られている。ちなみに、松岡洋右が外務大臣の椅子を降りたのは昭和十六年七月、「大東亜戦争」開戦の半年まえだった。

一年まえの「松岡洋右論」で、松岡の日米開戦反対論に随順してか、「私自身のごときも、日米戦争絶対反対論者である」と言い切った杉山が、またまた松岡に追従したのか、「新しい責任感を」（『改造』昭和16・11時局版）では、「バランス・システムによつて摩擦の回避をのみ最高の要請のごとく尊奉し、そこから練金術のやうに新しい力がわき出すであらう、といふ幻想から醒めるのに、日本が一年四カ月も費したのであった」と言い出す始末では、松岡を失脚させた近衛首相にどんな憾みがあったとしても、論壇人としてはいささか軽卒のそしりは免れまい。そのうえ、第三次近衛内閣の倒壊後誕生した東条内閣に、「我々は、勇躍かういふ地位についた人々こそ、満腔の敬意をもつて支持を捧げることが出来る」とか、「東条新首相の性格には、我々の期待に背かないものがある事を確信する」に至っては彼の真意を疑われるのも無理はない。

それはともかくも、このように時の宰相に満腔の尊敬と支持を表明したにもかかわらず、ジャーナリズムへの出番が杉山平助に訪れなかったのは、はたしてさきの尾崎秀樹や田中正二郎の見解にある松岡洋右の失脚ということと関係があるのだろうか。おそらくそうではなくて、戦時下の物資不足で新聞や雑誌が縮小され、物理的な意味で紙面自体が狭くなったことであり、もう一つはマスコミ・ジャーナリズムの性格や方針が変わったからだと思う。

戦局が深刻となるにつれて新聞や雑誌の頁数は減り、新聞の学芸欄や文化面のスペースは極端に少くなり、昭和十七年八月から九月にかけて、政府の命令で新聞の統廃合が実施された。雑誌の方は十九年に行われたが、用紙事

情の悪化はいかんともしがたく薄くなるばかりだった。当然、誌面に登場する内容も自から限定されよう。とくに杉山にとって痛手だったのは、かつては桧舞台でもあり、いわばホームグラウンドであった『改造』が「教養主義的傾向」を強めたことだ。

一九四一（昭和十六）年以降の「改造」論文欄は、宮沢俊義、谷川徹三、田辺元牧、牧野英一ら、旧来からの執筆者に加えて、中野登美雄、荒木光太郎、灘波田春夫、大串兎代夫ら右翼的色彩の濃厚な論客が登場しはじめた。続いて、いわゆる世界史学派と称される京都帝大の、高山岩男高坂正顕、鈴木茂高、西谷啓治らが、主として『中央公論』を舞台としながら、『改造』への寄稿も活発になった。

（関志果他編『雑誌「改造」の四十年』）

つまり、これまで総合雑誌にまで登場することの少なかった国粹主義の錚々たる連中や著名な国立大学の教授連が堂々たる論陣を張るようになって、限られた誌面を独占したのである。『公論』のごときは、教養主義の傾向をとらなかつたかわりに、大東塾・影山正治のグループの「準機関誌化」（影山正治『日本民族派の運動』）して、皇道精神や文学維新を宣揚したし、れっきとした軍人も誌面に顔を出し、戦時官僚が筆を競ったのである。

そういう状況のなかで中堅の文学者がジャーナリズムに登用されたのは大方は、せいぜい徴用作家の現地報告ぐらいである。陸海軍報道部が報道班員の手記をまとめたり、新聞社・雑誌社も戦記シリーズを競って出版した。いったいこういう環境のなかで、杉山平助のように名だたる国粹主義者でもなく、大学教授の肩書きも学問も持たず、徴用作家として時局的な話題にも事欠く者にどうして出る幕があらうか。時代はそんな精神的余裕も誌面のゆとり

もないほど切迫していた。杉山得意の現代人物論や権威のない雑文はこの雑誌にも載っていない。

逆にいえば、杉山平助の辛辨だが庶民的な人物論に人びとが興味を持ち、アカデミック臭のない現実的な社会評論に耳を傾けた「支那事変」前後の時代は、まだまだ物心両面にわたって余裕もあればゆとりもあって、のんきだったいえよう。実際、「大東亜戦争」下の新聞は大本営発表の戦果が紙面をうめ、雑誌は、「聖戦」の意義を説き、国民を指導し鼓舞する論文ばかりが誌面に並んだ。もはや、かつてのように、憂国の至情だけを表白することも、知識人を威嚇することも必要なかった。「聖戦」を哲学的に説き、殉国の尊さを思弁的に語るには、杉山の「粗暴な肉声」ではあまりにもお粗末であつた。そこで彼はご用済みとしてジャーナリズムに棄てられたのである。

今は、私にとって、新しい生活がはじまつてゐる。それ故に、この数年間、時にふれ、私の書きつつつて来た随筆・評論その他を、集めて一冊とした本書を、記念のために「文学と生活」と名づけた。

およそ、生活の匂ひのにじみ出してゐない理論は、すべて空虚なものである。奔放な理論家には、奔放な内面生活があり、精敵な哲学体験の建設者たちには、またそれぞれの精敵な生活といふものがあつた。

この日頃の私の主張なり、論説なりが、偽つたものであつたか、或は空虚なものであつたかを検討するには、まづ私の生活を吟味してもらうのが、何より手ツとり早いであらう。随筆ほど、不用意に、その人間と生活を語るものはない。その意味で、この書物は、私の生活の報告書の一片をなすものとして、私は審判者の前に提出する。

右は、彼の最後の評論集となつた『文学と生活』の「まえがき」である。日付は昭和十七年二月。「奔放な理論

家」を自任してき彼が、「生活の匂ひのにじみ出ていない理論」に締出されてしまった惜しさがこみあげているではなか。その扉の「いろいろな草花がある／いろいろな鳥がいる／いろいろな人間がいる／杉山平助」のペン書きの自筆も印象的だ。失意の杉山の風貌が目に見えかぶ。このあと南方視察に出かけたが詳細はわからない。

昭和二十年八月十五日、戦争は終り疾風怒濤の時代は去った。多くはないが、杉山平助にも再び発言の機会が与えられたが、それもつかのま、二十一年十二月一日、疎開先の茨城県多賀町大字河原子一八八番地で波乱の生涯を閉じた。享年五十二。妻と三人の子供が遺ったが、妻も次の年に夫の後を追った。この間に発表した「文学者の反省」(『新小説』、21・2)、「日本人の性格」(『新人』昭和21・2)、「人間の文学」(『新潮』昭和21・6)を読むかぎり、時流便乗者には相変らず舌鋒は向けても、自らそれに便乗はしなかった。共産党の政治犯が釈放され、占領軍にも天皇制廃止の動きがあるなか、彼は『東京朝日新聞』の「声」欄に「天皇制を論ず」(昭和20・11・11)を投書して、その擁護を訴えた。この一点で、彼はオポチュニストの汚名をそそいだ。

参考文献

特集 杉山平助氏の作品と印象(『三田文学』11・3)

阿部真之助 杉山平助のこと

青野季吉 杉山氏小論

上泉秀信 最初に逢った杉山君

原実 飛躍した杉山平助氏

和木清三郎 気の好い気の弱い男

杉山平助論

杉山平助論

× ×

前田河広一郎 杉山平助の正体（『読売新聞』 8・7・11）

矢崎弾 杉山平助論——主として彼の批評的性格について——（『新潮』 9・3）

春山行夫 杉山平助氏へ（『行動』 9・9）

魚谷文之進 杉山の進歩性と反動性（『都新聞』 八大波小波Ⅴ 9・9・28）

無署名 杉山平助論（『新潮』 10・2）

岡邦雄 杉山平助論（『行動』 10・6）

室伏高信 杉山平助と大森義太郎（『文芸』 10・11）

岡邦雄 杉山平助氏の「新恋愛論」（『文芸』 12・3）

矢崎弾 杉山平助のインテリ魂（『渦渡期文芸の断層』 昭森社、12・4）

無署名 人物素描・杉山平助（『文芸』 12・9）

無署名 人物評・杉山平助（『新潮』 12・8）

高沖陽造 杉山平助論（『中央公論』 13・8）

高沖陽造 地獄からの脱出——杉山平助氏の主張（『中央公論』 13・10）

花田清輝 赤づき——杉山平助の肖像画（『文化組織』 15・1）

板垣直子 匿名批評の発生と流行（『現代の文芸評論』 第一書房、17・11）

荒正人 肉体なき杉山平助（『人物評論』 21・8）

大宅壮一 匿名批評の先駆者・杉山平助の断面（『文学界』 30・9）

丸山信 杉山平助のデビュー（『三田評論』 39・10）

尾崎秀樹 杉山平助論（『大衆文学論』勁草書房 40・6）

紅野敏郎 杉山平助（氷川烈）の発言——春風を斬る（『本の散歩道・文学史の森』冬樹社、54・1）

著書目録

一日本人 昭文堂 大14・12（新潮社、昭8・12、中央公論社、昭14・10）

春風を斬る 大畑書店 昭8・5

文芸従軍記 改造社 昭9・6

氷河のあくび 日本評論社 昭9・12

人物論 改造社 昭9・12

愛国心と猫 千倉書房 昭10・1（『春風を斬る』改題）

現代チャーナリズム論 白楊社 昭10・2

文学的自叙伝 中央公論社 昭11・1

絶望と享楽 三笠書房 昭11・9

街の人物評論 亜里書店 昭12・2

新恋愛論 中央公論社 昭12・3

現代日本観 三笠書房 昭13・3

支那と支那人と日本 改造社 昭13・5

女性面会日 第一出版社 昭13・10

新しい日本人の道 第一出版社 昭13・10

杉山平助論

楊子江艦隊従軍記 第一出版社 昭13・10

自由花 改造社 昭14・7 (小説戯曲集)

悲しきいのち 改造社 昭15・10

二十一世紀物語 教材社 昭15・12

日本文化と社会 教材社 昭15・12

つひに来たる日 萬理閣 昭16・9

文学と生活 有光社 昭17・8

文芸五十年史 鱗書房 昭17・11

資料

小説「日本人」を読め(二段ぬき)

生田長江

国民新聞 大正十五年一月十一日

その名を耳にしたことさへもない、作者杉山平助氏から突如として原稿紙千四五百枚にも当るほどの長編小説の寄贈を受けた。作者の有名人と無名人とを問はず、余り急いで小説類を読んで見ることの習慣を有しない私が、小包の包を解かせると直ぐに取り上げて、最初の一頁でもものぞいて見やうといふやうな気になつのは単に偶然な事であるよりも、寧ろ運命的な事であつたらしい。

読むともなしに、つい無意識のやうに十頁ばかりを読まされて来た私は『今こんな物を読んでゐてはいけない、もう止さう』と幾度か自分をたしなめながら、どうしても止めることが出来ないで、到頭私の二日間のプログラムを滅茶苦茶にして、殆ん文

字通り一氣に読でしまつた。読まされてしまつた。少くとも近代の日本語で書かれた小説なぞの中に、これほど力強く私を引きずり込み、共鳴させ感動させ、驚嘆させた物はない。

初めの内は、その部分々々を驚嘆しながらも、尚ほ幾分の批評家的態度を保持しながら読んでゐた。けれども、やがて私は、大きく口を開き絵看板を見てゐる少年の如き、一個の純粹なる享受者となつてしまつた。読み了つて私は、それまで頻りに吸ひ込んでゐたらしい息を外へ吐き出した。そして私の受けた第一印象について、一刻も早く何事かを語らねばならぬやうに感じて來乍ら今尚ほ、そもそも何と言つてよいか知らないでゐる。

◇

私は私の言ひ方を大袈衣にすぎると云ひ度い人達には勝手に云はせやう。とにかく私が現代の日本の文芸家に対して、最も先づ要望してゐたものの殆んど総ては、今この一無名作家の処女作「日本人」に於て、立派に与へられているやうに思はれる。そこには第一に、単にそれだけでも一流の芸術を以て許されるに足るやうなすばらしい心理学がある。それはスタンダールの鋭さをプルゼエの精ちさをドストイェフスキの深さを想はせる。とり分け、児童及び少年の心理に、人間苦の一切を象徴化して見せてゐる処なぞは、覺えず感嘆の叫びを挙げさせる。どこを見ても、單なる現実を現実の假に並べ立ててゐるやうな写實的冗慢はなく、記述の一項一目が悉く、皆ぬきさしのならぬ象徴化された真実である。

思ひ切つて新しい其思想と哲学とは思ひ切つて新しい其感覺に具現されて居り、人生的含蓄を有しないやうな、ただ一の感覺的表現も見出されない。

この作品は、凡そ無邪氣な、ナイーブな、お目出度い芸術を求める人々に全く縁がない。そこには、蟲がいいといふことの反對物が一杯につまつてゐる。心理解ぼうの鋭利なメスを自分自身の動機と性格とに加へて、血みどろになり乍らどこ迄もどこ迄も抉り込んで行く道德的内省のむごたらしさ、物凄さ、壮烈さ。

さうした反省に伴ふニイチエ的な貴族的な日本人的な羞恥感、廉恥心、自尊心。

胴震のつくやうな恐ろしいベエグスで以て終始を一貫しながらも、つねに安撫なセンチメンタリズムからの超越と、面憎いほどの余裕をもつたユウマアと、自嘲の朗かな空氣とを忘れない。

恐らく、この「芸術」はこの作者の「人間」以上の物でないだらう如く、この作品の表現形式はその内容より以上の物ではない。しかも、そこに見出されるものは、最もあかぬけた、最も生々とした日本語であり、実にこんな様式である。



本書の広告文も亦、殆んど誇張なき事実の報告公表である。その中に『その鋭利な頭脳とユニッな性格により』云々といひ、『見よ、ここに日本人の魂は、世にも美しく世界に新訳された』といひ、『そのさん然たる芸術的成功は、実に古代ギリシア悲劇に匹敵する圧力と均奢美とを兼ね収め、しかも輕快純真のユウモアは、全篇到る処噴水の如く湧出し、興趣真に美を描く能はざらしむ』といつてゐるところのものは、その假移して来て私のこの読後感につけ加へることが出来る。

殊に私の悦ばしく思つたのは、今日所謂階級意識を通過し超越してしまつた、ブルジョア氣質からもプロレタリア根性からも解放されてしまつた資本主義否定者によつてのみ、本当に芸術らしい芸術が生れ得るといふ私の主張を事実の上に証拠立ててくれたこと。

及び、所謂新感覺派などによつて代表されたるエセ『新時代』のほかに本当に新しく健かなる『新時代』があり得ると云ひ、あらねばならぬと云ふ私の見地の正しきをも、事実の上に証拠立ててくれたことである。

日本の文芸界はこの作者の如き人々の出現によつて近く大きな新時期を画されて行くことであらう。

小説『日本人』こそは、新しい日本を代表する文芸として、外国語に翻訳されて恥しくないところの物である。この事を誰が否定し得るか。

天才といふ言葉を漫然たる意味に用ひて、作家や作品を批評することは、とり分け此頃の私の趣味に適はないのではあるが、若し現代の日本にも真に天才的な文芸家があるかどうかと問はれるならば、作者の如き最も先づ最も確実にその一人であるべき

ことを、断乎として私は答へるであらう。

（序でながら、この機会に於て誤を正して置きたい——曾つて私が島田清次郎君の「地上」第一部に対して加へた好意的批評の当否は暫く措き、私が彼に許すに天才者を以てしたと伝ふる如きは、私を誣ぶるも甚しいものである。）

杉山氏の『日本人』に対する精細なる批評は他日にゆづり、免に角、これだけの事をでも書いて、取敢へず紹介推奨して置くのは批評家としての私自身の義務であると考えたのである。

一九二五年 十二月廿二日